
かたつむり

touji77

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かたつむり

【コード】

N8707U

【作者名】

touji77

【あらすじ】

降りしきる雨の日、紫陽花に囲まれた庭先にいるかたつむりの視線の先には……

かたつむりは空を見上げていた。

暗雲垂れ込める曇天の下、絶え間なく雨が降り続いていた。紫陽花に囲まれた庭先にかたつむりはいる。頭上に広がる灰色の雲は隆隆として筋肉を彷彿とさせる膨らみがある。数刻前から静かな雨が降っていた。音も立てずに降り注ぐ小雨は自分や周りの草木を打ち、周りに広がる紫陽花の葉が微かに揺れていた。

かたつむりはゆっくりと視線を戻す。その視線の先には一軒の古びた民家。厚手の茶色のカーテンで閉じられた窓越しに、そのわずかな隙間から少女が男ともみ合いになっているのが見えた。いや、もみ合いというより一方的な暴行を受けていると言った方が正しい。坊主頭のいかつい中年の男がまだあどけなさの残る少女に対し、殴り、蹴り、引っつかみ、壁に叩きつけるといった野蛮な行為を何度か繰り返している。男は平手で少女の頬を強かに打つ。ばちんと肉と肉のぶつかる音が響いた。

2

「痛いかな？ どうだ、痛いといってみろ」

また男が少女の頬を殴った。かたつむりが見ている事などしらず、男は何度も何度も少女に拳をぶつけてくる。

達磨だるまのように腫れ上がった顔の少女が男を睨む。憐れみをともなつた蔑んだ目。

「どうしたの？ もっと殴ればいいじゃない」

少女は男を挑発するように、そして小馬鹿にするように言った。

少女の事をかたつむりは知っている。毎朝、通学路で「おはよう」と屈託の無い笑顔で自分に声をかけてくれる少女。その笑顔が重い

殻を背負った矮小で卑小な自分にとって唯一の生き甲斐であり、支えだった。今はその顔が醜く歪められている。許せなかった。

ふつふつと湧き上がる憎悪を胸に宿らせながらかたつむりは、ゆつくりと窓に近づく。鍵はかかかっていない。引いて中に入った。部屋の中では少女の赤いランドセルが無造作に投げ出され、中から教科書やリコーダーが飛び出ていた。テーブルの上に載っていた酒瓶は横向きに倒れ、酒がこぼれ、滴が垂れ、畳の上で小さな溜まりを作っている。外で降りつづける雨のようだ、とかたつむりは思った。

「なんだ？ てめえ」

深酒で呂律ろれつが回らない男が、突然の来訪者に驚きながらもたどたどしく誰何してきた。この男と話す事など何もない。Ｔシャツの内に忍ばせた包丁を取り出し、腰溜めに構え、男に向かって飛び込んだ。

外ではまだ小雨が降り続いていた。いつも歩いている通学路が全く別の道のように見えた。小雨によって灰色のアスファルトが湿った藍色に変色したせいだろうか。前方に数人のクラスメイト達が歩いてくるのが見えた。いつも自分をいじめてくる奴らだ。思わず目を伏せた。

「おい、かたつむり。こんな時間にどうしたんだ？ また宿題忘れて先生に居残りさせられたか？ あははは」

嘲笑するクラスメイト達に向かって、『かたつむり』と呼ばれた少年はただ静かにやりと笑った。

(後書き)

読んで頂き有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8707u/>

かたつむり

2011年9月7日12時40分発行